

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02428

研究課題名(和文) 中世唱導資料の多角的研究

研究課題名(英文) Reseach on the Medieval Texts of Preaching from various viewpoints

研究代表者

牧野 淳司 (MAKINO, ATSUSHI)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：10453961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代の終わり頃から、法会で行われた説経の内容が記録されるようになる。そのような唱導資料について、本研究では、日本文学・日本史・仏教思想史・美術史など、関連諸分野の研究成果を参照しつつ、複数の観点から分析を行った。これにより、中世の唱導が、造られた仏像に生命を吹き込む役割を担っていたこと、戦乱で命を落とした者の恨みを解消する活動をしていたことなどが明らかになった。豊富な情報を含む唱導資料は日本文化の特質を照らし出す価値を持つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

各地の寺院資料の調査・研究が進む中で、中世の唱導資料も数多く紹介されるようになってきている。だが、十分な解読が行われているとは言えない。本研究では、日本文学・日本史学・仏教思想史・美術史など、関係諸分野の研究を参照しつつ、唱導資料を多角的に読解することを試みた。未だ十分とは言えないが、唱導資料が豊富な情報を含むこと、さまざまな分野で資料として活用することが可能であることを示した。唱導資料により、これまで知られていなかった日本文化の一面を発見することができる。

研究成果の概要(英文)：The contents of the preaching performed at Buddhist assemblies start to be recorded from time at the end of the Heian Period. In this study, we analyzed preaching material from more than one point of view. At that time, we referred the research results of Japanese literature, Japanese history, Buddhist thought history, and Art history. As a result, it became clear that the Buddhist statue was given life by the preaching, and that the preaching was going to repose the souls of dead soldiers. The texts of preaching include rich information, and have the value which illuminates the characteristic of the Medieval Japanese culture.

研究分野：日本文学

キーワード：唱導 寺院資料 説経 日本古典文学 平家物語 法会

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 折口信夫が「唱導文学」という言葉を使用してから、国文学研究では、「唱導」をめぐる研究が盛んである。「唱導」は仏の教えを広く説く行為を言うが、法会の場で唱導僧が行った説経がその中心的位置を占め、芸能(身体を使ったパフォーマンス)や音楽・絵画も伴って、多彩に展開した。説経は時と場に合わせた行われる当座の弁舌であったから、文字化されることは少なかったが、平安時代の終わり頃から、説経の内容が記録されるようになる。そうして後代に伝わった唱導資料の調査・紹介が続いている。早い時期のものとしては永井義憲・清水宥聖編『安居院唱導集 上巻』(角川書店、昭和47年)が、まとまった形で安居院(比叡山の僧侶である澄憲に始まる唱導の流派)の唱導資料を紹介した。その後、国文学研究資料館の『調査研究報告』が1991年から数年間継続して「安居院唱導資料纂輯」を掲載した。近年には、唱導資料を多数保管する神奈川県立金沢文庫から、平安時代末の南都で活躍した弁暁の唱導資料が公刊された(神奈川県立金沢文庫編『尊勝院弁暁説草 翻刻と解題』勉誠出版、2013年)。本研究の代表者は、2017年に国立歴史民俗博物館所蔵『転法輪鈔』の翻刻・解題を公にした。こうした動きにより、唱導資料を多角的に読解することが可能な状況になっている。

(2) 寺院資料の研究の進展とともに、法会の場における儀礼とそれに伴う芸能について関心が高まっている。国際的かつ学際的な共同研究の成果も出されるようになってきた。たとえば、ルチア・ドルチェ、松本郁代編『儀礼の力 中世宗教の実践世界』(法蔵館、2010年)は、中世仏教の教義・思想面ではなく、さまざまな実践面に焦点を当てたものである。唱導という営みは、仏教文化圏における宗教的实践の一つであり、特に中世寺院が作り上げた儀礼世界を構成する重要な要素である。その意味でも、唱導とその資料に注目・関心が高まっている。本研究の代表者は中世寺院における儀礼テキストを総合的に研究する共同研究に参加する中で、国立歴史民俗博物館所蔵『転法輪鈔』の研究に取り組んだ。中世寺院が生み出した文化的遺産の一つとして、唱導資料の価値を見直していくことが求められている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は日本の中世に作成された唱導資料を多角的に研究する。日本文学や日本史学・仏教思想史の研究者により、数多くの唱導資料が紹介されてきた。しかし、学界および社会において、唱導資料の価値が広く認識されているとは言えない。本研究では、唱導資料の文学史のおよび文化史的意義を多角的に考究することで、その資料的価値を明らかにし、多くの分野で唱導資料が広く活用されることを目指す。そのために、唱導資料をさまざまな視点から読解することを試みる。

(2) 唱導資料を読解するに当たって、隣接分野(日本史・仏教思想史・美術史など)の研究成果をできるだけ踏まえるようにする。それにより、唱導資料がいくつかの学問分野で価値を持つことを明らかにできる。同時に、日本の古典文学との関係性には特に注意して研究を進める。唱導は言葉の力を駆使して行われるものであり、「文学」の世界とつながっている。「文学」を視野に入れることで唱導資料の特質・価値をより明確にしていくことを目指す。

3. 研究の方法

(1) 未調査・未紹介の唱導資料の読解・研究を進めつつ、すでに影印や翻刻などが公にされている唱導資料について、日本文学・日本史学・仏教史学・美術史学など関連分野の最新の研究成果を参照しながら、注釈的な読解を行う。院政期に活動した澄憲や弁暁の唱導資料を主要な研究対象とする。

(2) 唱導資料自体の読解を進めつつ、平家物語や源氏物語、あるいは和歌などの文芸と唱導との関係性について追究していく。物語などに描かれた唱導の場面や、引用される唱導の言葉を手掛かりに、寺院における唱導という営みが物語を含むさまざまな文化を生み出していった様相を解明する。

4. 研究成果

(1) 美術史学の成果を参照しつつ、唱導資料を読解した。平安時代後半から鎌倉時代にかけて、巨大な寺院・塔が建立され、おびただしい数の仏像や仏画がそこに安置された。また、経典の書写も盛んであった。唱導資料をそのような社会状況を踏まえて読解することで、唱導が、堂舎建立や造仏・写経という行為を積極的に促していたことが判明した。具体的には澄憲が、優填王(世界で最初に仏像を造ったとされる優填国の王)が仏像を作ったという先例(物語)を唱導の場で巧みに語っていたこと、それにより仏像は単なるモノではなくなり、生きた仏と同等の救済の力を吹き込まれたこと、それにより人々はますます造像を行うようになったと予想されることを指摘した。また、運慶の仏像を安置することで有名な伊豆の願成就院について、その落慶供養の表白を澄憲が作成していることを示し、その表白から、源頼朝の東国における仏法興隆事業が、天台僧である澄憲の唱導の力を借りて進められていることを明らかにした。これらの成果により、美術史学の分野において、唱導資料が価値を持つことを示すことができたと思う。なお、

願成就院を含む鎌倉で建立された寺社に關係する表白については、金沢文庫で開催された特別展「運慶 鎌倉幕府と靈驗伝説」の関連事業として催されたシンポジウム「運慶と東国の宗教世界」(平成30年2月18日、於横浜市立大学)で「鎌倉幕府の寺院造営と唱導 願成就院・鶴岡八幡宮・永福寺」と題して研究成果を報告した。

(2) 物語制作により人々を惑わせた罪で地獄に堕ちたとされる紫式部と源氏物語を、法華經を書写することで救済し、源氏物語を縁として仏法に結縁しようとする人々が共同で営んだ源氏供養の法会の場合と關係すると考えられる唱導資料「源氏物語表白」の読解を進めた。これは和歌や物語に使われる言葉と漢語、さらには仏教語が入り混じったテキストであるが、注釈的に読み進めることを試みた。同時に、源氏物語の中の法会場面のいくつかを分析し、和歌や物語における「御法」という言葉の使われた方について調査した。これにより、平安時代の人々が、法会の場合を共有することで共に仏法に縁を結び、さらには現世から来世につながる契りをお互いに結ぼうとしていたこと、そのような「結縁」を求める心性を唱導が育てていたことを明らかにした。「源氏物語表白」というテキストは、唱導により作られた「結縁」の心性が生み出したものとみなすことができる。

(3) 仏教が女性にどう相對したかということについて、従来、その救済のあり方が問題視されてきた。女性の成仏の可否、男性との優劣など、差別の様相が分析されてきた。そのような中、人々に大きな影響を与えた説經で「女人」という存在がどのように説かれたか、女性が施主となった法会で、また多くの女性が聴聞した法会で、どのような説經が行われたかについて、従来ほとんど研究がない。一部、唱導資料に言及した研究もあるが、表面的分析に終始しているように思われる。澄憲の唱導資料をこの観点から分析したところ、必ずしも女性差別的な説經とは言えないこと、むしろ女性の思いに寄り添う言説が見られること、そのことは澄憲らが行った説經と相互交渉を持つと考えられる和歌の分析からも言えることを明らかにした。

(4) 後白河法皇の周辺で活動した澄憲や弁曉が、後白河法皇が主催した法会の場合、法皇について、どのような言説を繰り広げていたかを分析した。澄憲や弁曉は、無常を感じ悲哀とともに生きる法皇の姿や、ひたすら仏道修行に励む法皇の姿を法会の場合で発信していた。また、法皇が乱世で命を落とした人の魂を救済しようとしていることも、法会の場合で述べていた。そのような法皇の姿と思いを世に知らしめる役割を唱導が担っていたことを明らかにし、それと平家物語との關係性を分析することで、唱導の言説が物語を生み出す材料の一つとなっていることを明らかにした。

(5) 後白河法皇の時代の唱導が戦乱で命を落とした人の靈魂に、どのように向き合ったかを分析した。澄憲や弁曉は、戦乱は「乱臣」「賊子」が引き起こしたもので、後白河法皇がそれを討伐したのは当然のことであったとしている。そのような中、亡魂供養を営み、「謀叛」を起こした人の罪もゆるして、死者を平等に救済しようとしているのが後白河法皇であるとする。死んだ者たちの側に非があったことを説くことでその死を受け入れさせ、後白河法皇による供養を受けられることの有難さを説くのが、後白河法皇の時代の唱導であった。このような唱導の内実を明らかにした上で、平家物語との關係性について、建礼門院關係章段を中心に分析した。その結果、澄憲や弁曉といった後白河法皇の傍らで活動した僧侶の唱導が、建礼門院關係物語の原型を形作った可能性があることを明らかにした。

(6) 2018年度に、唱導資料を所蔵している機関や、唱導を研究している研究者が所属する機関が連携して、唱導を中心テーマとする特別展が開催された。

- ・国文学研究資料館特別展示「祈りと救いの中世」10月15日～12月15日
- ・神奈川県立博物館特別展「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」10月27日～12月9日
- ・神奈川県立金沢文庫特別展「顕われた神々 中世の靈場と唱導」11月16日～1月14日
- ・國學院大學博物館企画展「列島の祈り」11月3日～1月14日

これらの企画に協力し、図録の一部を分担執筆することで、本研究の成果を発信した。これにより、澄憲の唱導資料が中世文化の特質を解明するための多くの情報を含んでいることを示すことができた。たとえば、經典供養により力を得た神々により守られる「日本国」を澄憲の唱導が作り上げていたことを示した(コラム「唱導により顕われる日本国とその神」神奈川県立金沢文庫特別展図録『顕われた神々 中世の靈場と唱導』2018年11月、84～85頁。その他、国文学研究資料館特別展示図録『祈りと救いの中世』2018年10月のうち、「転法輪鈔」など8項目を分担執筆した)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 牧野淳司	4. 巻 第84冊
2. 論文標題 『平家物語』と唱導文化との関わりについての総合的研究 後白河法皇をめぐる唱導の観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 33～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 牧野淳司	4. 巻 27号
2. 論文標題 「御法」の物語としての源氏物語 源氏供養の発生と結縁の心性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代学研究所紀要（明治大学古代学研究所）	6. 最初と最後の頁 右25～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 牧野淳司	4. 巻 53号
2. 論文標題 唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 6～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 牧野淳司
2. 発表標題 日本中世の唱導における女性の問題 澄憲の『法華経釈』の検討
3. 学会等名 第9回明治大学・高麗大学国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 牧野淳司
2. 発表標題 唱導資料から見る堂舎建立と造仏の営み
3. 学会等名 説話文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧野淳司
2. 発表標題 僧侶による説経の隆盛と平家物語の誕生
3. 学会等名 研究集会「The Take of Heike and other warrior tales:a a Japanese epic?」,(パリ・デイドロ大学)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 牧野淳司
2. 発表標題 源氏物語注釈の諸相
3. 学会等名 国際学術研究会<交響する古代 - 古代文化資源の国際化とその意義Vol. 3 ->, 明治大学古代学研究所主催, (明治大学)(国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松尾葦江編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数
3. 書名 『軍記物語講座第2巻 無常の鐘声』 論文「後白河法皇と建礼門院の「鎮魂」 寺院における唱導から見る『平家物語』の「大原御幸」」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----